

## 第 11 章

# 京都都心における地域住民とマンション住民の協働

——都心的まちなか居住の可能性——

### はじめに

京都市都心部では、新旧住民のコミュニティの問題の他、町家とマンションが混在することによる景観の問題、祇園祭の山鉾町における祭の担い手をどうするかといった伝統の継承の問題など、京都特有の課題がある。しかし、歴史ある祇園祭を継続してきた地域と町衆の力は、新たな展望の可能性も秘めている。

京都におけるコミュニティに関しては、すでに多くの研究があり、新・旧住民の属性や意識、交流、地域の行事への参加状況、そして山鉾町における保存会と町内会の関係性、中高層集合住宅がコミュニティや景観に及ぼす影響などについて、成果が蓄積されてきた。そして、これらの研究や考察では、住民を「戸建住民」と「マンション住民」、あるいは「新住民」と「旧住民」という2つの集団ととらえ、これらの課題を2つの集団間の問題、あるいは対立構造として論じられていることが多い。たしかに、戸建住宅や町家に住む旧来の地域住民と、マンションに住む新しい住民では、祇園祭や地域の行事、コミュニティへの参加に関し、傾向に違いがあるのは事実であり、集団全体としての大きな傾向の違いを描くことは必要であり重要なことであったと考えられる。しかし、集団を集団として分析する限り、なぜマンション住民であっても、地域の行事などへの参加が多く、コミュニティになじむ場合とそうでない場合があるのか、それを阻害するどんな個人的な事情があり得るのかについて示唆を得るには限界がある。

それに対し、都市社会学の分野においては、社会ネットワークの下位概念として、パーソナルネットワークという概念を用いた研究が行われている。従来、社会学では、人間関係を集団内関係、あるいは集団を媒介とする社会関係として位置付けられることが多かった。しかし集団の構造と規範の理解によるのみでは、人びとの行動を説明することや、現代社会の多様で複雑な人間関係を十

分に把握することは難しい。このような背景から生まれた社会ネットワーク論は、森岡によれば「集団ではなく、個人を中心に展開するネットワーク、しかも機関間関係を含む幅広いネットワークに注目し、このネットワークの分析をとおして人びとの意識と行動を説明するとともに、そこにネットワーク形成の、また社会形成の主体者としての側面を読み込もうとする、新しい理論」と紹介されている [森岡 2004]。

パーソナルネットワークは、社会ネットワークの中でも個人を中心として拡がる他者とのネットワークを指す。フィッシャーは、ワースによるアーバニズム論の都市における人間関係の特徴——家族や友人などの親密な関係の衰退と、合理的・目的的な短期的関係の優位——に対し、パーソナルネットワークの分析を通して反論している。大谷はフィッシャー理論の日本の都市への適用の妥当性について、中国・四国地方の住民を対象にパーソナルネットワークを調査することで考察している [大谷 1995]。松本は大都市圏におけるパーソナルネットワークに広域化の傾向がみられること、および名古屋での調査から、東海三県出身者にとって、都心居住が中距離友人ネットワークを拡大させる傾向があることを見出した [松本 1995]。森岡は都市度やその他の都市的社会的要因などがパーソナルネットワークに与える影響や効果について論じている [森岡 2000]。その他、育児期の女性のパーソナルネットワークとサポート関係に関する研究、高齢者のパーソナルネットワークと意識や生活との関係に関する研究、パーソナルネットワークと家族観や夫婦関係に関する研究など、大きくはパーソナルネットワークと人びとの意識や行動との関係を問う研究、およびパーソナルネットワークそのものの特質を問う研究などがある。パーソナルネットワークとコミュニティに関する研究としては、震災後の復興団地をフィールドに、パーソナルネットワークがコミュニティ形成に及ぼす影響を論じたものやコミュニティ形成のきっかけを考察したものなどがある。

本章では、京都が引き継いできた伝統的なまちなかの暮らしとその変化、表出してきた現代的課題を踏まえ、祇園祭を通じた今の町衆の先進的な試みと暮らしを紹介し、それらの事例についてパーソナルネットワークという概念を用いた理解を試みる。具体的には、京都の都心部の山鉾町居住者のもつパーソナルネットワークの特徴から、今後の京都の都心的まちなか居住を展望したい。

## 1 京の「地」としての「まちなか居住」

京都の都心で営まれる暮らしの歴史的背景については、多くの文献や研究がある。ここではそれらの文献を参照し、京都の「地」としての「まちなか居住」を紹介したい。

### 1) 京都の町（町中）

京都の町は中世の頃より両側町であったとされている。通りの中心線に町の境界線があるのではなく、通りの両側で1つの町を形成している。町は町中<sup>ちやうじゅう</sup>とも呼ばれ、通りは町の共用空間であった。

近世、それぞれの町には木戸門や番小屋、塵溜、地藏堂などの他、会所があった。会所は「町中持ち」と表現される町の共有の町家<sup>ちやういえ</sup>であり、ここでは町の寄合、会合などが行われた。山鉾町の会所では、祇園祭も執り行われ、今も町会所や町席などと呼ばれ残っている。

### 2) まちなか居住の担い手

町の運営は町に住む町衆によって担われていた。町には町式目という条文があり、日々のくらしのルールのみならず、有事の際の役割の取り決め、紛争時の解決方法、また町並みに関する規制まで含まれる場合もあった。町は現代であれば行政が担うべき機能、不動産所有売買権、居住転出入認許可権、印鑑証明発行権等を有する、みごとに自治組織として成立していた。

まちなか、特に祇園祭の山鉾を持つ町は、京都では大店が軒を連ねる商いの町である。そのような町では、商店の旦那衆が大きな役割を果たしていた。もとより、町の運営は家持層のみで行われ、結果として町年寄と呼ばれる町の代表も、旦那衆の互選であったと考えられる。しかし、1つの大店があれば、その家族のみならず従業員も、住み込みや近くの町家に借家人として町内に暮らしており、町は「住む場」であり「働く場」でもあり、現代風に言えば「職住一体」の暮らしであった。

### 3) 町組から元学区への近代化の過程

明治維新、京都は長く続いた都の地位を明け渡すことになる。これは京都の人びとにとって、大変な苦悩であったことが、多くの文献から読み取れる。しかし政府はその代替に、多額の勸業基金の貸与と産業基金の支給を行い、都ではなくなったものの、京都の伝統産業は新たな技術の導入に成功し、近代

化を遂げた。

1869(明治2)年、町組の再編により、三条通りを境に上京33番組、下京32番組が成立した。1つの番組には平均25、6の町が含まれ、番組ごとに小学校が置かれた。小学校は町組(番組)会所を兼ね、近世の町コミュニティは番組単位に拡大された。番組はその後「区」と改称され(1872(明治5)年)、さらに「上京区」「下京区」の編成によって「組」と改称された(1879(明治12)年)。さらに「組」は「学区」と改称され(1892(明治25)年)、これが現在も「元学区」として継承され、京都の地域コミュニティの単位として重要な意味を持っている。

京都は1889(明治22)年、市制が施行されているが、町衆から区への行政機能の移行は不完全であった。先に述べたとおり、もともと京都では自治の意識が高く、にわかになできた行政が、すぐにその機能を代替することは難しかったと考えられる。しかし1898(明治31)年、市制特例が廃止され、初代民選市長が選出された。そして、諸々の行政機能は完全に市・区に移管され、学区は教育に関する機能のみを担い、行政の下部組織的な役割のためには、町を単位として「共同組合会」という組織が新たに発足し、現代の「町内会」につながっている。

このように、京都の町を基礎としたコミュニティは、中世より現代に至るまで継承されている。しかし見方を変えれば、山鉦や「町中持ち」と呼ばれる不動産を所有する町中にとって、近代化は不動産所有権をはじめとする諸権利を持つ法人格や、行政権を剥奪されていく過程であった、との理解も可能である。近代以降、京都のまちなか居住は徐々に変化していく

#### 4) 祇園祭とまちなか居住

祇園祭は日本の三大祭に数えられ、7月の1カ月間に渡り京都市中心部、及び八坂神社で行われる。しかし、有名なのは山鉦が立ち並ぶ宵山と、山鉦巡行の四日間である。その起源は、一般的には869(貞観11)年に疫病退散を願い、66本の鉦を立て、神輿を神泉苑に送った時とされている。その後、鉦は華麗に装飾されるようになり、中世の頃より山鉦は、町衆の財力を示すようになっていった。応仁の乱(1467年)により山鉦は全滅したが、町衆は33年の年月と、莫大な費用をかけて、祇園祭を復興している

前述のように、京都の町は自治の意識が高く、町は法人格と権力を持ち、町の会所も「町中持ち」の町家であり、そこで祇園祭も行われた。山鉦は、町衆



写真11-1 鯉山の巡行

写真提供) 赤井又三郎氏

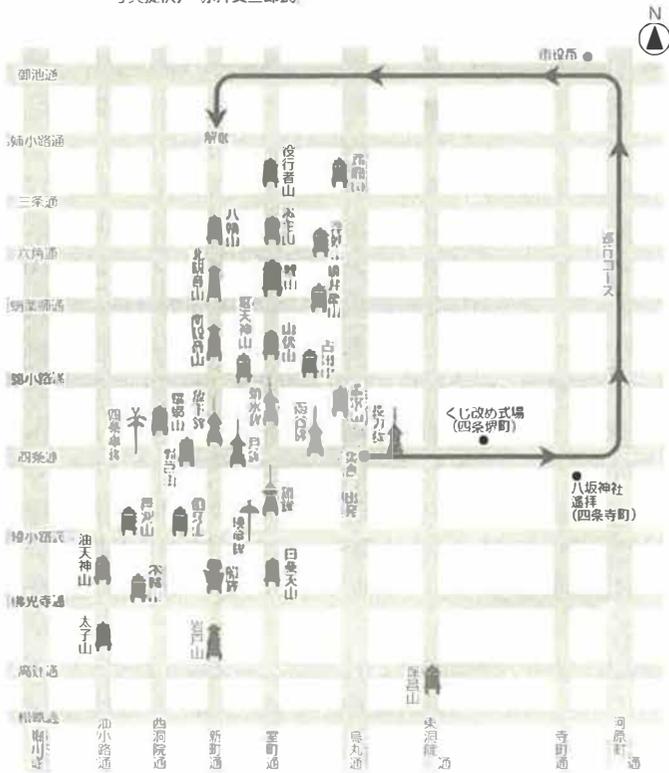


図11-1 祇園祭の山鉾位置と巡行コース

出典) (財)鯉山保存会「祇園祭鯉山」より引用

の誇りであり祇園信仰の象徴であると同時に、自治の象徴でもあった。1898（明治31）年、町は法人格とすべての行政機能を失ったが、この自治の精神は今も京都の町衆気質として継承されているのではないかと考えられる。

町衆にとって、祇園祭のもう1つの大きな意味は、町衆の皆で共有する最大にして唯一の「楽しみ」であったということだろう。「昔は祇園祭いうたら楽しみやった。昔の就労環境は苛酷やった。しかし、『祭』の間、店は休み、おいしいもんも食べられる。祇園祭はほんまに楽しみやった」（鯉山町・（財）鯉山保存会理事長山本氏）。

祇園祭を「余暇」というにはあまりに言葉が軽く、軽率であるのかもしれない。しかし、人びとの生活を「職」「住」「余暇」という本書のキーワードで区切り、祇園祭を当てはめてみれば、それは現代の言葉で言えば「余暇」の範疇であったと言えないだろうか。そして、京都のまちなか居住は、「職」「住」「余暇」がみごとに一体化したものであったと考えられる。京都の高い自治意識と強固なコミュニティは、「職」「住」「余暇」と、町という空間をコミュニティが共有することで育まれたのではないだろうか。

#### 5) 都心部における居住の課題

近代から現代に至り、京都の都心のまちなか居住はさまざまな課題をかかえていく。近代化に伴い、商店は企業となり、従業員はサラリーマンとなっていた。店主・従業員ともに住まいは町の外にあり、職と住はもはや一体とは言えなくなる。町に居住者が減っていくと、祇園祭は「楽しみ」ではなく、わざわざ手伝いに来なければならない「負担」となる。さらに個人の「楽しみ」・「余暇」は多様化し、個人化していく。「職」「住」「余暇」の分断化が進んだのである。山鉦を維持し、毎年祇園祭に出すことが難しくなり、山鉦の存続については危機的な状況が今も続いている。

戸建住宅とマンションの混在に伴う課題もある。京都市には現在、約1400の管理組合、約8万5000戸のストックが存在している。そのうち、京都市都心部の河原町通から堀川通、御池通から五条通にかけての、いわゆる「田の字地区」には228の管理組合が存在する。図11-2は、京都の「田の字地区」におけるマンションの建設と公示地価の動向を示している。1980年後半から1990年前半にかけての公示地価の上昇にともない、一時マンションの建設件数は減少するが、1990年前半以降における公示地価の下降にともない、再び急増している。1973年から1991年までに87件のマンションが建設されているのに対し、

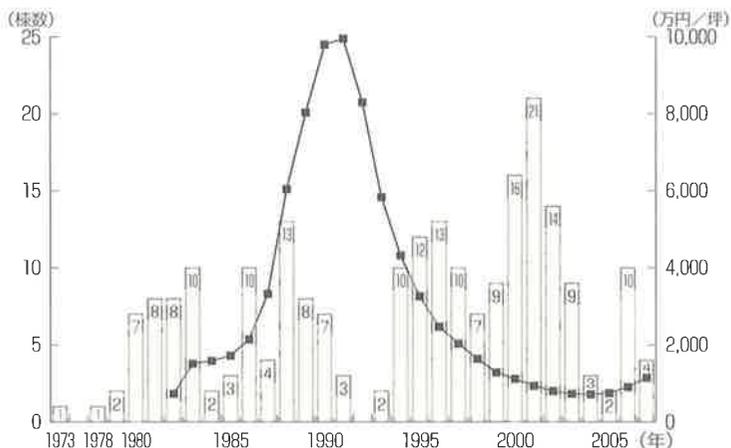


図11-2 京都の田の字地区におけるマンション建設と公示地価の動向

出典) 建設件数については、京都マンションデータバンク掲載のデータに基づき作成。

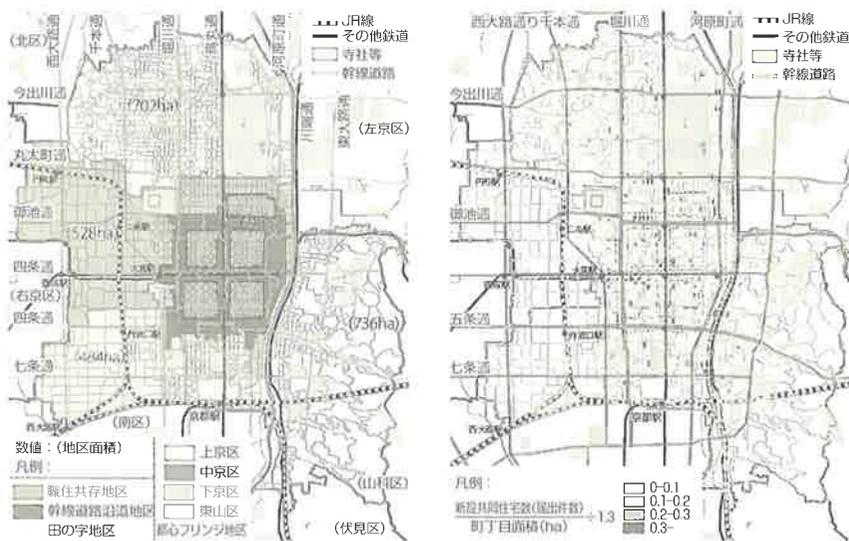


図11-3 都心4区における新設共同住宅 (1990~2002年)

出典) 建築計画概要書に基づき作成。

1993年から2007年までに141件のマンションが建設されている。図11-3は、1990年から2002年の13年間に、京都市の都心4区で建設された町丁目毎の新設共同住宅の件数を示したものである。都心4区全体でみても、1990年以降の共同住宅の建設が「田の字地区」に集中していることがわかる。

これは京都に限らない課題であるが、一般的に地域の住民とマンションの居住者間でコミュニティを構築していくのは難しい。京都の場合、戸建住宅には町家が多く含まれる。すなわち戸建住宅とマンションの混在は、京都の伝統的な建物とマンションの景観上の不調和という課題にも発展する。

このような京都のまちなか居住の課題を解決するのは難しい。しかし、その解決の兆しとも言える事例はあり、以下に現代の町衆の先進的な試みと暮らしを紹介したい。

## 2 鯉山町の事例

### 1) 山鉾町・鯉山町の変化

京都市中京区の鯉山町は、祇園祭の鯉山を持つ山鉾町である。その位置する室町通は、昔から京都の繊維関連商業の中心であり、京都では最も豊かと言われる通りであった。鯉山町においても、呉服等の商いを営む経営者はこの地に暮らし、従業員も住み込みが多く、町民であると同時に、祇園祭の担い手であった。事業が拡大すると、この町には会社だけを残し、郊外に居住地を求める経営者が多くなった。丁稚奉公、住み込みという就労形態は減り、通いで働きに来る従業員ばかりになった。それでも経営者は従業員を祇園祭の手伝いに出してくれた。しかし、徐々に休みを返上して手伝う従業員は減少した。祭の人手はどんどん足りなくなった。

最も人手が要るのは、山鉾の立ち並ぶ宵山3日間の町席の当番である。厄除ちまきやお守りなどの頒布だけではない。夜に出るゴミを早朝までには掃除しなければならない。当番は朝6時から夜中24時まで決めるが、町席に泊り込むので、実質は24時間体制である。3日続くとかなりの重労働となる。さらにその後には巡行当日が控え、忙しさはピークに達する。

### 2) マンション建設と、町民が話し合い考え抜いた組織の設立

1990年代、バブルが崩壊し、地価が下がると、京都のまちなかはマンション建設ラッシュとなる。その時期、鯉山町に住む世帯は7軒、あとは企業や店の

数少ない従業員が祇園祭の担い手となっていた。企業や店子も含め、祭を担う(財)鯉山保存会(以下保存会)の会員は、町民約30軒。そこに135戸のマンション建設が決定した。

マンションの売主は、当時の現職の保存会の理事長であった。その人物の信望もあり、マンション建設に対する反対は、町内では全くなかった。

圧倒的に戸数の多いマンション住民をどのように受け入れるのかという問題は、マンションも含めたコミュニティ再編という意味よりは、町民にとって、祇園祭の今後の担い手の確保という視点からも検討すべき課題であった。しかし、どんな住民がやってくるのか、全くわからない。そんな不安と期待の中で今後の体制についての検討が進められた。

マンション住民に町入費(保存会に対する入会金のようなもの)を支払ってもらい、保存会に入ってもらうのは、関心のない人には無理だろう。また、135戸と30軒というバランスの中で、多数決の意思決定というのも避けたい。当初は、町内会も別、保存会にも一切関わってもらわない、という案もあったという。

同時に、祇園祭を担っていくのは、居住する7軒だけでは難しく、手伝ってくれる店の従業員も減っているという現状は、はっきりと認識されていた。やはり住んでいる人が中心でないとダメだ、門戸を広げましょう、という意見も出された。135戸の中には祭の好きな人もいるだろう。そんな人を引っ張り込んだ方が、今後のためには良い。最終的には、マンション住民に協力をお願いすることが決まった。

鯉山友の会(以下友の会)のアイデアは、実はマンション建設が決まる3年前前に、全国レベルでの展開をめざして発案されたものだった。祭に来てくれた人に対し、ノートに住所を書いてもらい、情報を発信し、必要な時に寄付や手伝いを募るというものである。しかし、そのための事務局の立ち上げなどの課題があり、アイデアは立ち消えとなっていた。その時に作成した友の会会則をマンション住民の友の会入会希望者に、そのまま適用することになった。会則には、友の会を保存会の下部組織とし、友の会会員は保存会における議決権を持たないが、保存会役員の手指示のもとに祭行事に参加できることや、会費などが定められている。また、貢献が認められた友の会会員は、本人の希望と保存会の承認により、保存会会員となることができる。

### 3) 新旧住民で支える祇園祭

1998(平成10)年2月、マンションへの入居が始まった。初年度の友の会へ



写真11-2 町席にてチマキ頒布のお手伝い  
出典) 写真は(財)鯉山保存会「祇園祭鯉山」より引用



写真11-3 子どもたちのローソク売り  
出典) 写真11-2に同じ。



写真11-4 チマキの「袴つけ」  
出典) 写真11-2に同じ。



写真11-5 鯉山の飾りつけ  
出典) 写真11-2に同じ。

の入会は37名。その中には、町民が待っていた熱意のある祭の担い手も存在した。町席当番は、マンション住民からの希望者が年々増えた。格段に人数が増え、入れ代り立ち代りの当番が可能となり、個人にかかる負担が減った。巡行のお供を希望する人、もっと深く祭に関わろうとする人もあった。鯉山町の従来の町民と、マンション住民から選出された友の会事務局を中心とした活動は、広く知られるようになり 一部のマスコミにも取り上げられた。

2002（平成14）年、2名のマンション住民の保存会入会が承認された。2003（平成15）年には、マンションからさらに1名が保存会に入会した。2000（平成12）年には広報誌「鯉山友の会」が創刊され、2004（平成16）年中に10号までが発行された。

#### 4) 町内会の活動の活性化

一方で、マンション住民を含む町内会も活性化した。「バスツアー」、「歩こう会」といった町内レクリエーションには、マンション建設の翌年より、マンション住民全員に案内が配布され、多くの参加を得た。「婦人会」の活動は、祭りの準備手伝いなどの人数も増え活性化し、子どもの数はゼロから40～50名となり、地蔵盆が復活し「子供会」ができた。「鯉山町をみどり豊かな街にしませんか」をキャッチフレーズに、鯉山町園芸クラブが2000（平成12）年11月に発足した。発足式には従来の町民とマンション住民が共に参加した。その後町内の各所に草花を植えたプランターが置かれるようになった。2001（平成13）年11月には鯉山ホームページクラブ（<http://www.koiyama.com/>）が発足した（その後、後述の「鯉山町マンスリー」に含まれる）。このホームページでは祇園祭と鯉山の町衆が紹介されている。さらに2002（平成14）年7月には鯉山町茶道クラブが発足し、未経験者も気軽に茶道を楽しむ会が定期的に開催されている。いずれのクラブも、従来の町民とマンションの住民が入り混じり、活動が展開されている。そして、2002（平成14）年11月に、町内会の広報紙「鯉山町町席だより」が創刊された。また、町内の運営・企画を行う企画室が発足し、町内の行事の内容などについて話し合う場も「鯉山町マンスリー」として毎月開催されている。これには従来の町民とマンション住民が入り混じり参加している。

#### 5) 鯉山友の会の変化

2005（平成17）年、マンション住民の多くは、町民となって8回目の祇園祭を迎えた。友の会会員は、この時50名程である。この年、友の会の活動は節目を迎えた。

5月、全国レベルでの展開をめざし作成された友の会会則は、マンション住民を対象としたものに改定された。同時に、マンション建設以前から、保存会と町内会の二本立てとなっていた組織だが、鯉山保存会発行・鯉山町発刊の「鯉山町衆かわら版」の創刊に至り、2つの組織は限りなく一体的に祇園祭の活動を展開することとなった。そのことにより、祇園祭に関するマンション住



民への情報は、友の会を通さずに、直接保存会・町内会から全住戸に発信されることになった。一応友の会会員に限定されていた祇園祭のお手伝いも、町民であれば誰でも参加が可能となった。その結果、お手伝いの希望はさらに増え、祇園祭と関わりをもつマンション住民が増えた。友の会会員は、毎年1000円のお供えをすることと、ちまきの配布に与ることとで他のマンション住民と区別されるのみである。

30軒の町民のまちに、135戸の住民がやってきた。その時の緩衝材として機能した友の会は、第1の目的を果たし、その意義・方向性がやや曖昧になりつつある。今後は、友の会への入会に関わりなく、従来の町民とマンション住民が、ともに新たな町民として、さまざまな町内の活動や祇園祭の活動を行っていくことになる。それが可能となる土壌が育まれたことも、友の会発足の大きな成果といえるだろう。2005（平成17）年の山鉾巡行出発前の「町衆記念写真」には、172名の町衆の笑顔が収まっている。

#### 6) お町内の変化

そして2007（平成19）年、それまで長く同じ人物が担ってきた町内会長の輪番制が開始された。2007（平成19）年は町内の事業所代表者が町内会長として選出されたが、これにより今後はマンション住民から町内会長が選出される可能性も出てきたのである。

さらに2008（平成20）年4月、保存会への入会希望者を募るチラシが、マンションの全住戸に配布された。「保存会に入りませんか。」というお誘いである。平成10年のマンション建設からちょうど10年であった。マンション住民は新たな町衆として、やっと町内に受け入れられたということができのかもしれない。

### 3 太子山町の事例

2つ目の事例として、京都大学大学院工学研究科都市環境工学専攻居住空間学講座高田研究室で行われた研究成果を紹介したい。

冒頭で述べたとおり、従来の研究では、地域住民とマンション住民を2つの集団として捉え、それぞれの特徴や集団間の関係を検討しているものが多い。それに対し、この研究ではコミュニティの問題を一人ひとりの住民のコミュニティとの関わり方の差異にあると考え、個々人のパーソナルネットワークの分

析に基づく考察が行われている。

### 1) 太子山町でのマンション住民受け入れ

太子山町も京都都心部の山鉾町である。山鉾の維持管理を通じ、町単位での地域活動が活発に行われてきた地域である。太子山町でも、1980～90年代に、3棟のマンションが建設された。マンション建設に関して地域住民が望んだ事は、マンションに入居する住民が太子山町に住み続ける事を前提としたうえで、祭り等の地域における継承者を育成する事であった。このような理由により太子山町内に建設されているすべてのマンションは、基本的にはファミリー向けであり、かつ分譲である事を条件に建設・管理・運営されている。また、マンション建設に際して地域住民は「協定書」を作成し、太子山町の住民には祇園祭に積極的に参加してほしいという旨の記述を掲載している。

### 2) 太子山町住民のパーソナルネットワーク

研究では、太子山町の全住民に対し、個人のパーソナルネットワークを問うアンケートを実施している。アンケートでは、自分が「親しい」と考える個人を5人あげてもらい、その方たちを「パーソナルネットワーク構成員（以下、PN構成員）」としている。そしてPN構成員それぞれの居住地、知り合ったきっかけを聞いている。

回収した調査票のうち、有効な36票を分析し、以下の結果を得ている。

〈太子山町住民をPN構成員に含む住民は居住年数が長い傾向にある。〉

ただし、少数であるが、居住年数が長くてもPN構成員に太子山町住民を含まない場合もある。逆に居住年数が短くても、PN構成員に太子山町住民を含む場合もみられた。それは、ほとんどが育児期にある住民で、そのことが太子山町内にPN構成員を形成することを促していると考えられる。

〈単身世帯は太子山町住民をPN構成員に含まない傾向にある。〉

単身世帯のPN構成員は仕事を通じて知り合っていることが多く、すべての構成員と仕事を通じて知り合ったという住民もみられた。

マンション住民と戸建て住民の交流は、一般的に少ないと考えられている。しかし、この調査では、太子山町住民をPN構成員としてあげているマンション住民が、28人中10人みられた。それは、居住年数が比較的長い住民と子育て期にある住民だった。また、仕事を中心とした生活をする単身世帯の場合には、

太子山町住民とのパーソナルネットワーク形成がかなり少なく、難しいと考えられる。

### 3) 共通の興味を見つけネットワーク構築

さらにアンケート回答者の中から、協力の得られた11名については、ヒアリングを行い、コミュニティとの関わりについて詳細に聞いている。

住民 A 氏と住民 B 氏は、ともに戸建住宅に住む地域住民だが、その PN 構成員としてあげられた太子山町住民には、違いがあった。住民 A 氏の場合には、PN 構成員は親族である 1 人を除いてすべて町内や学区内の活動の役員であり、地域の活動を通じてパーソナルネットワークが形成されていることがわかった。このケースでは、住民 A 氏が地域の環境維持に対して、高い意識を持っていることがインタビューを通じて聞き取れ、このような意識からパーソナルネットワークを形成しているといえる。住民 B 氏の場合には、太子山町住民 3 名と、以前町内に居住していた学区内の住民を PN 構成員としてあげており、互いに家を行き来する関係で、いわゆる旧来の町内関係を築いている。町内や学区内の活動を通じてというよりは、日常生活の中でパーソナルネットワークを形成していた。一方で住民 B 氏は、町内の活動にも積極的に参加している。それらの活動を通じて、マンション住民とも顔を合わせるそうだが、それが個人的な関係になることはなく、その理由は共通の関心がないため、としている。

マンション住民である住民 C 氏と住民 D 氏についても、同様の違いがあった。住民 C 氏は PN 構成員として、太子山町内の戸建て住民をあげており、保存会や町内の活動を通じて親しくなったとしている。住民 D 氏は、やはり太子山町内の住民をあげているが、いずれもマンション住民であり、知り合ったきっかけは管理組合の集まりや生協の共同購入だった。一方で、住民 D 氏は、祇園祭などの町内の活動にも参加しているが、決められたことをしている程度で、パーソナルネットワークを形成するほどのお付き合いとはなっていなかった。

また、町内に PN 構成員を持たない住民も、仕事を辞めた後には、これまで以上に町内の活動に参加するかもしれないと答えており、今後の町内の活動には、参加する可能性があることがわかった。

以上から、祇園祭などの町内の行事は、他の住民と知り合う機会にはなっても、そこで知り合った住民同士のその後の関係は、必ずしも日常的な付き合い

になっているとは限らないという傾向がわかった。また、町内の活動に積極的に参加することでパーソナルネットワークを形成する住民もいれば、共通の興味を持つ住民をみつけ、パーソナルネットワークを形成している住民もいるということがわかった。

たとえば、多くの住民が地域の良好な環境を維持することに高い意識を持つことなどは、望ましいことではあるが、多くの住民が同じ価値観を持つことを前提としたパーソナルネットワーク形成の促進は難しい。しかし、住民B氏やD氏のように、共通の関心を持つ住民とパーソナルネットワークを形成している例はいくつかみられた。

現代の都市部では、住民それぞれが多様な価値観を持つのは当然であり、そのような多様な住民が、それぞれのパーソナルネットワークを地域の中で強化することが、コミュニティの維持につながると考えられる。そのためには、共通の関心を持つ住民と接する機会を増やすなど、パーソナルネットワークを発生させるために何ができるかを考えることが有効であると考えられる。

#### 4 今後のまちなか居住に向けて

太子山町における研究成果を踏まえたうえで、鯉山町の事例を振り返ると、鯉山友の会の意義が曖昧となっていったのは、住民それぞれの地域におけるパーソナルネットワークが緊密に形成されていった結果ではないかと感じられる。従来の町民とマンション住民の区別なく、一人ひとりのパーソナルネットワークが町内に形成されることにより、「マンション住民がどんな人たちかわからない」という不安は解消され、緩衝材としての友の会は必要がなくなったと理解できる。同時にそれぞれの共通の興味によるさまざまな活動が活発化していった。

鯉山町におけるマンション建設からの10年間は、「住」と「余暇」の一体化、言い換えれば同じ町に住む人びとによる「余暇」の共有化とパーソナルネットワーク構築のプロセスであったと捉えることはできないだろうか。祇園祭を共に「楽しみ」、さまざまな活動のクラブや同好会が設立されていったことは、まさに「余暇」の共有化のプロセスだと感じられる。現代に力強いコミュニティを築くには、「余暇」の共有化をベースとしたパーソナルネットワークの構築が必要なのではないだろうか。

このように考えると、何も祇園祭を特殊な事例における特殊な条件と捉える必然性はないように思う。「余暇」の1つの形であると捉えれば、他の地においても大いに応用できる要素があるのではないだろうか。たしかに祇園祭は、山鉾町のコミュニティ形成のための強力で絶好の条件となっている。しかし、祇園祭のない地域であっても、一人ひとりの住民がその地域において緊密なパーソナルネットワークを形成することが、良好なコミュニティの礎となる。そして、住民が自らの興味に従ってパーソナルネットワークを構築していくことができる環境を考え、実現していくための努力は可能なのではないだろうか。単なる交流会的なものではなく、イベントを行う時には常にテーマとキーワードを付与したものとする、情報の発信手段も、テーマやキーワードに関係するルートを使うなどの工夫も考えられる。2つのグループを結びつけるというよりも、個人と個人の出会い・関係を構築していくことを支援するという視点を持つことが重要だと考えられる。

そして、ワースによる都市の定義の1つに「異質性」とあるように、都市には異質なものを異質のまま受け入れるキャパシティがある。多様な人びとの存在があるからこそ、都市においては多様な余暇を通じたパーソナルネットワークが、ある場所に重層的に存在できる可能性が高いといえる。そこに「都心的」まちなか居住の可能性を見出したい。

最後に、今後検討すべきと思われることがらを2つあげたい。1つは、単身者の居住について、もう1つは旦那衆の思いの後継についてである。太子山町の調査では、単身者の生活における「住」と「余暇」の分断化が浮き彫りとなった。「職」を中心にパーソナルネットワークを構築し、町内に全く知り合いのいない単身者はめずらしくない。それは必ずしも悪いことではない。しかし、町内や地域との交流を求めながら、きっかけのつかめない単身者も多いのではないだろうか。同時に、町内にパーソナルネットワークを構築している居住者は子どもを通じて知り合っていることが多いことが確認できたが、「子どもができるまで、近所に知り合いなんて、いなかった」と語られるのを聞くことも多い。逆に言えば「子ども」以外のきっかけは、ほとんどないのである。子どもを持たず、町内に無縁の居住者に、いかに門戸を開くのか。今後、日本の社会全体に単身者が激増していくことは、決定的な予測である。その仕掛けを検討していくことが必要となろう。

本章を執筆するにあたり、多くの方々のお話をお伺いしたが、今も尚、京都

のまちなかには旦那衆が健在であり、その強い思いを感じた。「この、前の通りにねえ、前の通りがいつもにぎやかで、人がたくさん通らあったら、ほんまにええと思うんですわ」（鯉山町・(財)鯉山保存会理事長山本氏)。自らは他の地に住まいを移している場合もあるのだが、多くの方が、地域や通りを思う強い気持ちで語られた。京都都心のまちなか居住には、今も旦那衆・町衆の力強い存在がある。その思いをいかに後世に引き継いでいけばよいのだろうか。その答えを見出すことができれば、現代の京都都心のまちなか居住は、サステイナブルなものとなるのだろう。

#### 注

- 1) 「町衆」とは、林屋辰三郎の定義によると、当時の政府や幕府にも対抗できるほどの力を持ち、応仁の乱後の京都復興に貢献し、自治組織を運営して文化の担い手としても大きな役割を演じた京都の裕福な商工業者をさしている。本章では、「町衆」はこのような商工業者も含め、「町内に住まう者」の意で使用している。
- 2) 第2節「鯉山町の事例」は、鯉山町在住の河合力氏、田原祥光氏へのインタビューを元に文章を書き起こし、その後(財)鯉山保存会理事長山本彰彦氏、元鯉山町町内会長浅見儀明氏、現(2009年度)町内会長の柴田道輝氏、マンションに居住の赤井又三郎氏、北川和男氏を含む皆様のご校正・ご了解を得ました。ご協力に対し、改めて御礼申し上げます。

#### 参考文献

- 岩崎信彦他編 [1989]『町内会の研究』御茶の水書房。
- 上地浩之 [2005]「パーソナル ネットワークを用いた都市部混住地域のコミュニティに関する研究」京都大学修士論文。
- 大谷信介 [1995]『現代都市住民のパーソナル・ネットワーク』ミネルヴァ書房。
- 加茂みどり・高田光雄・後藤智揮 [2005]「京都太子山町における住民のパーソナルネットワーク パーソナルネットワークを用いた都市部混住地域のコミュニティに関する研究その1」『日本建築学会大会梗概集 E 2 分冊』日本建築学会、pp. 461-62
- 京都新聞社編 [1995]『京の町家考』京都新聞社。
- 財団法人鯉山保存会 [2006]『祇園祭鯉山』
- 後藤智揮・高田光雄・加茂みどり [2005]「パーソナルネットワークの視点からみた京都太子山町住民のコミュニティとの関わり パーソナルネットワークを用いた都市部混住地域のコミュニティに関する研究その2」『日本建築学会大会梗概集 E 2 分冊』日本建築学会、pp. 463-64。

- 巽和夫・町家型集合住宅研究会編 [1999]『町家型集合住宅 成熟社会の都心居住へ』学芸出版社。
- 谷直樹・増井正哉編 [1994]『まち祇園祭すまい 都市祭礼の現代』思文閣出版。
- 深見茂 [2008]『祇園祭と町衆』京都市主催平成20年度政治・文化セミナー資料。
- 佛教学編 [1995]『京都の歴史 4 伝統の生成』京都新聞社。
- 佛教学総合研究所編 [1998]『成熟都市の研究 京都のくらしと町』法律文化社。
- 松本康編 [1995]『増殖するネットワーク』勁草書房。
- 森岡清志編 [2000]『都市社会のパーソナルネットワーク』東京大学出版会。
- [2008]『地域の社会学』有斐閣。
- 森岡清志編著 [2004]『改定版・都市社会の人間関係』放送大学教育振興会。
- 脇田修・脇田晴子 [2008]『物語 京都の歴史 花の都の二千年』中央公論新社。

#### 京都のコミュニティに関する研究論文

- 石崎敦子・上野勝代 [2003a]「京都市都心部山鉾町における町内コミュニティに関する研究」『平成15年度日本建築学会近畿支部研究報告集』日本建築学会, pp. 673 76
- [2003b]「京都市都心部山鉾町における町内コミュニティに関する研究」『日本建築学会大会学術講演梗概集(東海) F 1 分冊』日本建築学会, pp. 1329 30.
- 片方信也・室崎生子・小伊藤亜希子・上野勝代 [2001]「京都市都心部における中高層集合住宅の街区に及ぼす影響について」『都市住宅学』35号, 都市住宅学会, pp. 81 86.
- 小伊藤亜希子・片方信也・室崎生子・上野勝代 [2001]「京都市都心部における中高層集合住宅居住者による地域ストック評価」『都市住宅学』35号, 都市住宅学会, pp. 75 80.
- 小伊藤亜希子・片方信也・室崎生子・上野勝代・奥野修 [2004]「京都市都心部における中・高層集合住宅建設にともなう共同住宅居住者と周辺居住者のコミュニティ形成」『日本建築学会計画系論文集』No. 585, 日本建築学会, pp. 111 16.
- 坂井裕介・鳴海邦碩・澤木昌典・岡絵里子 [2002]「京都市における元学区及び町内会の活動実態と都心マンション居住者の地域意識に関する研究」『平成14年度日本建築学会近畿支部研究報告集』日本建築学会, pp. 625 28.
- 中村淳・西川幸治・谷直樹・新谷昭夫・増井正哉ほか [1993]「都心地域における町コミュニティに関する研究 都市祭礼からみた都心居住・1990年祇園祭調査より その4」『平成3年度日本建築学会近畿支部研究報告集』日本建築学会, pp. 259 60.
- 西川知子・小伊藤亜希子・上野勝代・奥野修・片方信也・室崎生子 [2002a]「祇園祭山鉾町における共同住宅建設に伴う町コミュニティの変様に関する研究」『平成14年度日本建築学会近畿支部研究報告集』日本建築学会, pp. 589 92.

- [2002b]「祇園祭山鉦町における共同住宅建設に伴う町コミュニティの変様に関する研究」『日本建築学会大会学術講演梗概集（北陸）F-1 分冊』日本建築学会, pp. 553-54.
- 藤井智広・東樋口護ほか [1999]「京都都心における「新住民」と「旧住民」の交流・接点に関する研究——太子山町および西陣学区を事例として」『日本建築学会大会学術講演梗概集（中国）F 1 分冊』, 日本建築学会, pp. 731-32.

パーソナルネットワークに関する研究論文

- 秋月裕子・小浦久子 [2000]「パーソナルネットワークと地域コミュニティ——南芦屋浜震災復興公営団地におけるコミュニティ調査より」『都市住宅学』31号, 都市住宅学会, pp. 57-62.
- 澤岡詩野 [2003]「高齢期における住居選好及び公的介護サービス選好に及ぼすパーソナル・コミュニティ・ネットワークの影響」『日本建築学会計画系論文集』No. 566, 日本建築学会, pp. 113-17.
- 柴田和子・檜谷美恵子・篠田美紀・谷本ゆきえ・平田延明 [2000]「居住者のパーソナル・ネットワークから見たコミュニティ形成の現状——震災復興大規模団地におけるコミュニティ形成に関する研究（3）」『都市住宅学』31号, 都市住宅学会, pp. 96-99.
- [2002]「復興住宅団地における高齢居住者のパーソナル・ネットワークと共同居住意識」『都市住宅学』39号, 都市住宅学会, pp. 111-16.
- 田淵六郎 [2006]「都心高齢者のパーソナル・ネットワーク——名古屋市中における調査結果から」『名古屋大学文学部研究論集哲学52』pp. 97-109.
- 西岡絵美子 [2005]「住宅改善時に活用されるパーソナル・ネットワークについて」『日本建築学会大会学術講演梗概集（近畿）F-1 分冊』日本建築学会, pp. 1377-78.
- 野邊政雄 [1999]「高梁市高齢女性のパーソナル・ネットワークと主観的幸福感調査」の基礎分析」『岡山大学教育学部研究集録』第112号, pp. 57-78.
- [2001]「地方小都市に住む高齢女性のパーソナル・ネットワークの基本的特徴」岡山大学教育学部研究集録』第118号, pp. 31-37.
- [2003]「収入と地方小都市に住む高齢女性のパーソナル・ネットワーク」『岡山大学教育学部研究集録』第120号, pp. 23-30.
- [2005]「高齢女性のパーソナル・ネットワークとソーシャル・サポートの年齢による違いについて」『岡山大学教育学部研究集録』第128号, pp. 85-95.
- 前田尚子 [2003]「地方都市における育児期女性のパーソナル・ネットワーク」『岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要35』pp. 53-67.
- 松本康 [1995]「現代大都市におけるパーソナル・ネットワークの変容——コミュニティ解放仮説の検証」『名古屋大学文学部研究論集哲学41』pp. 143-68.